

気仙沼プロジェクト第 10 クール 活動報告書

1. 第 10 クールについて

- ・活動期間… 2011 年 9 月 17 日（土）～22 日（木）
- ・参加大学… 明治学院大学、東北学院大学、麗澤大学、西南学院大学
全 23 名（うち 1 人は早退）

2. 活動について

前日の全体 MT や当日の朝に挙手制で分担。

メンバーの大部分が瓦礫撤去またはアンカーづくりにとりかかるが、体力を考慮して、これらを 3 日以上連続で担当することは避けた。

○鮪立での瓦礫撤去

FIWC（他ボランティア団体）の方たちと、津波で流されたお宅のものを材質ごとに細かく仕分けした。長袖長ズボン、ヘルメット、防塵マスク、鉄板入りブーツ、皮手袋、（ゴーグル）、着用。

休憩は 30 分ごと。FIWC の代表の JUMBO さんは、常に 50% の力で取り組むことを最初に仰っていた。これは、重いものを無理に持って体力を消耗するよりも、力を持続できるようにするためである。

また、作業をしている人の近くを通る時は、安全のため声掛けをすることが大切ということも教えていただいた。

海のすぐそばのこの地区では養殖の網や重りなども、たくさん混じっていた。養殖や漁に使用するものは別に分け、漁師の方が再利用できるようにした。

依頼主の方や、トイレをお借りした高台のお宅の方ともお話する機会があった。

○写真洗浄・スキャン作業

津波によって流され届けられた写真を洗浄したのち、発見場所ごとに管理し、持ち主の方に返却する活動をおこなう写真救済プロジェクトのお手伝いをした。この団体は他にも位牌、卒業アルバムや証書などの思い出の品も洗浄し保管している。

写真にはカビや埃が付いているものもあり、マスクや手袋をして作業にかかった。メンバーは 1 日 4 人前後。

届けられた写真をスキャナーに通し、データ化してパソコンに保存する作業もあった。これらのデータは仮設住宅に持ち運んで公開するそうだ。これによって持ち主発見につながったり、持ち主が見つからなくても写真を見た方々の話の種になったりし

て、すこしでも嬉しい気持ちになってほしいということを写真救済プロジェクト代表の高井さんがおっしゃっていた。

○養殖業のためのアンカー作り

わかめ養殖のいかだを固定するための重りを作る作業。袋へ大量に入れる砂は、陸前高田市の砂だそうだ。

漁師さんをはじめとする地元の方や、RQの方（他ボランティア団体）の方とかかわりが持て、情報交換できた。

○土器の修復作業

津波によって表面化した土地から発見された縄文土器の修復。まず隣あっていた断片どうしを見つけることから始まり、見つかると接着剤でとめていった。

○津波の映像拝見

一部のメンバーで、ニュースでは見られないような生々しい津波の映像を拝見。人を助けに行って犠牲になった方の様子も見た。ことわざ「津波てんでんこ」（津波の時には自分の命を最優先にして行動すること）の重要性を実感。

○生活支援班

洗濯、清掃（体育館・トイレ・シャワールーム）、買い出し、夕食の炊事、後片付けを担当。男女混合にする案のもとに3～4人で構成。

買い出しはなるべく唐桑で済ませたが、どうしても必要なものがない場合は車で10分ほどの地区にあるスーパー（マイヤ）を利用。

・

○撤収作業

最終である今クールは、体育館をはじめとして調理場やシャワー室やトイレなどお借りしたところをすべて元よりきれいな状態でお返りする義務があった。

物品の片付けや清掃は大変だったが、お世話になった感謝の気持ちをこめて撤収作業できた。最終チェックは公民館の方にいただいた。

3. 個人の感想・気づき

震災があった春、私たちの大学は授業開始が1カ月延ばされ、5月から授業が始まりました。長くなった春休み中にボランティアに加わりたいと思っていましたが、小さなボランティアサークル（主に養護施設で活動）の代表でありながら私は「メンバーが集まらない」という理由で結局できないまま授業開始になってしまったのです。半年たった時期にどんな仕事を求められるかわからないが、やはり私のちいさな作業ひとつでひとりでも笑顔になってくれる可能性があるなら参加したい、という気持ちで今回の気仙沼プロジェクトにエントリーしました。

初めてのことばかりで最初は手順を覚えるので精いっぱいでしたが、やがて瓦礫撤去では単に瓦礫の山として見るのではなく人々の生活がそこにあったことを意識し、写真洗浄ではその写真の中の方に思いを馳せずにはいられなくなりました。作業の能率だけを重視するよりもこのように向き合っていくと、みなさんが元気であること、街の再生、写真が一枚でも多く持ち主に渡ることなどが、本当に私自身の幸せとなるように思えました。

また、「ボランティアのボランティア」について明学の浅川先生がお話されていました。これは、直接外に出て支援活動をするボランティアの食事や洗濯などの生活面を支援することで彼らの能率向上をはかり、結果的に本来のボランティア対象の方々への間接的支援になるということです。私はクール中の体調が万全ではなく、肉体労働系の仕事にあまりつけませんでした。ボランティア前に描いていたこととは違うので、私は自分が情けなくなったりしたのですが、第10クールを通して「ボランティアのボランティア」についてもある程度学び、実践できたと思っています。

またメンバー全員が、私たちが見てきたもの感じたものを周りに伝えることが本当に大切だと感じました。春休みの私のように、行こうと思いつつも踏み出せない学生がたくさんいます。私たちが自分の体験を伝え、また同時にボランティアの機会を整備し、そのような人たちの背中を少しでも押せたら…。その一歩が被災地にいるどなたかの笑顔につながると信じています。私たちが行ったときには瓦礫の撤去も終わっていない場所もまだありましたが、これからは心理支援が重視される段階になると言われています。周りも刺激されてボランティア活動や観光にでかければ経済的な支援にもなるし、話すだけでも心理支援になるかもしれません。私もこれからボランティア・観光どちらの目的でも定期的に足を運びたいです。

台風も接近し、天候には恵まれませんでした。寒い日に外仕事から帰ってきたメンバーにスープを出したり、期間を通して生活支援班以外の手の空いているメンバーが夜の後片付けを手伝ったり、思いやりを配れるととてもいい雰囲気第10クールでした。皆さん、ありがとうございました。これからも積極的に動いていきましょう。

人のために。という目標を立てて宮城県気仙沼市唐桑半島のボランティアにいつて来ました。テレビや新聞でみる被害状況は映画のワンシーンのようで、今、この瞬間に日本で起きていることであると信じることができずどこか他人事のような気持ちでいました。いま、この時に生きている人としてこの現場をみて少しでも人の為にととう、と思い参加を決意しました。

仙台から唐桑半島に向かう途中、マグロ漁の中心となっていた所の津波被害の視察をしました。初めて津波被害を生で見たとき、言葉にならない悲しい思いと瓦礫はほぼ撤去されなにもない街並みにただ坊然としました。4t もの船が陸のかなり奥まできていてその姿は実に異様で、津波の破壊力が現実として実感することが初めて出来た気がします。そこにいたボランティアメンバーの誰もが言葉を失って、ただなくなってしまった町を見つめていました。震災から半年経ってまだこれほどの瓦礫の山に私 1 人の力がなにか役に立つのかと不安も覚えました。

宿泊場所の体育館に到着して、早速瓦礫の撤去の作業に参加しました。ボランティア団体の FIWC さんの協力のもと鮎立地区の家の瓦礫撤去をしました。一つの家にかかる作業に戸惑いを覚えました。全壊の家では生活していたもの全てが瓦礫となりその仕分けの作業は大きいものではなくコップやお皿の割れた破片までもひとつひとつ分別し、きれいにしていくという作業を行いました。しかし、今は使えなくなり瓦礫と言われるものも、震災前はその家で大切に使われたものばかりであるということ、その家で生活していた人の思い出がたくさんつまっていた物であり、ただのゴミの分別作業としてではなく、大切に一つ一つに悲しさと感謝の気持ちで分別していきました。FIWC さんの代表の方が「100%の力ではなく、50%の力で行おう」と作業を始める前におっしゃっていて、初めはなぜそのような力加減でやらなければいけないのか理解できなかったのですが、このようにもの一つ一つの思い出を大切にすることができ、ボランティアとして参加することの意義や震災の激しさを痛感することができました。別の日には写真洗浄のお手伝いをさせていただきました。代表を務めている高井さんのお話は波乱万丈なものでした。農業をし始めて 3 年ほどで津波の被害にあい、イチゴ農園は全壊し仕事を奪われてしまいました。しかし、そこで嘆くのではなく、新しい気仙沼で今やるべきことを見つけ、

写真を綺麗に洗い元の人へ戻すということを行っています。自分自身のイチゴ農園再開を願いつつ目処がまだたたない今を、「汚れている写真があるから綺麗にする」と当たり前だけど誰も始めようとしなかったことを高井さんは誇りを持って行っていました。その話しをする高井さんの姿に、被災者の悲しみではなく輝きをみて、逆に私が踏み出す勇気を学びました。写真洗浄では、たくさんのお思い出がつまったアルバムを一枚一枚丁寧に洗って行きました。その家族の温かさ、子供の笑顔、綺麗な風景などさまざまな写真があり、その人が今無事であることを願い、またこの写真が本人の元へ届いて欲しいと願いながら丁寧に行っていました。また、気仙沼へ行ってたくさんのお被災者からの話を聞きました。

誰もが口をそろえて「もう被災者ではない。これからは復興ではなく、新しい町をつくる」と前向きで、笑顔で話していらっしゃいました。彼らは被災して家族や知人を失い、津波の衝撃を間近で感じ、今もその爪痕と共に生活しています。そんな彼らの言葉は、現地に立って聞いている私たちに大きな勇気を感じさせるものでした。実際に、津波の映像を見て涙を流す時もありました。今ここにたっている地のところまで津波が押し寄せ、たくさんの人々の悲痛な叫びや、町が勢いよく変わっていくシーンを見て、ここにいることの怖ささえ感じてしまうほどの衝撃な映像が映っていました。この地震と津波の衝撃は忘れられないし、忘れてはいけないものだと思います。

今まで自分のために、自分中心の世界で生きてきて、やっぱり人のためにというより、自分のためのほうが多かった気がします。ボランティアは偽善、自己満足などと言われることも多々あります。もしそうだとしたら、私の活動も自己満足のものになってしまいます。この人のために、という目標やそれに続く私の活動が正解だったのかは今はわかりません。一緒に参加された浅川先生は5年後10年後になってわかるものだとおっしゃっていました。この唐桑半島が東北が新しく綺麗な町になったとき正解がわかるのではないのかなと思います。そして、今回のボランティアで学んだことはボランティアはこれで終わりではないのです。もっとたくさんの人をつないで、たくさんの人に忘れられない、忘れさせてはいけない思い出を一人でも多くの人に伝えることが重要だとしり、まだまだボランティアは続くのです。少しでも多くの人が気仙沼のことを忘れないように、そして今もそこで頑張っている人たちがいることを知ることができて、今私がいる場所からどこでも支えることができることができました。人は一人では生きていけません。今、東北は離れていく人ばかりで人が少なくなっています。人と人がつながることで、生きていく彼らの糧になっていくことを忘れず、この経験を伝え、また彼らとかかわって生きていきたいと思いました。

法学部3年 原

私が気仙沼プロジェクトに参加した理由は、ニュースや新聞などで情報を得ているだけの自分にもどかしさを感じ、実際に自分の目で確かめたいと思ったからです。

実際にこのプロジェクトに参加してみて、津波の被害を受けた地域を見させて頂いたのですが、半年経った今でも瓦礫の山がいくつもあり、復興への長い道のりを感じました。

活動の中で、私は実際に被害にあわれた方のお宅へ伺い、津波の映像を拝見させて頂きました。

自分のふるさとが全て流される瞬間を目の前で見ていた地元の方のお気持ちを察すると、涙が止まらなくなりました。

私は今回の気仙沼プロジェクトを経験で終わらせるのではなく、これからの支援に繋がっていきたい、と強く思っています。

短い間でしたが、皆さんとの素敵な出会いに感謝しています。
本当にありがとうございました。

心理学部 3年 山口

私は今までボランティア活動をしたことがなくボランティアする人をよっぽど物好きな人だと思っていました。大学生のうちに関わりボランティアしとくのも悪くないなという気持ちで気仙沼プロジェクトに申し込みをしました。バス代で一万円徴収されたときはこのお金を募金したほうがよっぽど被災地のためになるのではないかと思ったほどである。私の中ではボランティアの役割ってなんなのだろうとぼんやりした気持ちでした。

実際に瓦礫撤去の活動をしたときはハードな作業で家一軒片づけるのはとても一日ではできませんでした。そこで初めて東北の人はこんなに大変な作業を半年以上もしているという事実に気付きました。自分の恵まれた環境での生活とこの人たちとの生活の差はあの震災だけなのである。かなり理不尽なものを感じつつもそういう現実が目の前にあるのでなんとも言えない気持ちになりました。さらに瓦礫撤去の活動をしていてちょっとずつではあるが片付いていくのは嬉しいのだが私は役にたっているのかという疑問が頭によぎりました。確かに作業は確実に進んでいる。だが私は何日間瓦礫撤去をしたという自己満足だけでこのプログラムを終えるのではないかと漠然と思っていました。結局現地に行っても、募金と一緒に自己満足を得るだけなのかと思っていました。

しかし、この考えはある漁師さんとの出会いで変わったのである。アンカー作りの作業の休憩中に地元の漁師さんが 3.11 のことをこう話してくれました。「被災してから絶望的な気分になった。何にもない状態。今は義援金などでどうにか必要最低限の生活ができるようになった。君たちボランティアの人たちと話すことにより癒される。メンタルケアされる。話をしている中で前向きな目標を見つけられる。例えば今年ワカメはダメやったけど来年は必ずおいしいワカメを作りますと口にする事で現実的な目標を帯びてくる。あの人と約束したから頑張るって気持ちになれる。」とおっしゃっていました。私はこの漁師さんとの会話がボランティア中で一番印象に残っています。こんな私でも役にたっていると実感できたし、人と人とのコミュニケーションはとても大切で人の悲しみはお金だけでは決して解決できない。人と人とのつながりの大切さを知りました。このつながりを自分の身近な家族・友人などに広めることから始めるのが現地に行った私が次にする役目なのかと思いました。

法学部 3年 久保田

私は被災地ボランティアに以前から興味を持っていて、夏休みに大学で活動があると知

って参加しようと思いました。しかし授業の一環でしかボランティアに参加したことがなく、自らボランティアに参加したのはこれが初めてでした。最初はこんな私が現地の方々に受け入れてもらえるのか、私に何が出来るのか考えるととても不安でした。しかし現地の方々は私たちをととても温かく迎えてくださいました。瓦礫撤去のときに出会った方は、暑い中での作業だったのでアイスを差し入れてくださったり、体調をいつも気遣ってくださいました。地元の漁師さんはほんとに元気でいつも笑顔でしたし、私たちが寒くないようにと風除けを作ってくださいたり、お刺身をさしいれてくださいたりしました。このようなたくさんの優しさに触れて、私は逆に元気づけられていました。ボランティアは人のためでもあるけど自分のためでもあると思いました。今回ボランティアを通してたくさんの人と出会うことができ、実際に現地に行ったことで東京には感じられないたくさんの発見がありました。また、ボランティアにとって大切なことは、継続だということも学びました。行って満足するのではなく、被災地での経験や感じたことを伝えていくこと、次の活動につなげていくことが大切だと思いました。私はこの一週間のボランティア生活を本当に充実できたと思います。それは地元の方々の優しさや、一緒に活動した方々のおかげです。本当に感謝しています。ありがとうございました。

文学部3年 松井

私は、前々から日々の報道を見ていて被災地に支援に行きたいと思っていたのですが、なかなか行動をおこせずにいました。そんな時今回のこのプロジェクトのことを知ったので、参加しました。行く前は、すごく不安だったのですが、1週間は本当にあっという間でした。行った人みんなが思っていると思いますが、やはりテレビで見ると生で自分の目で見ると現地の状況は全く違いました。本当にここに家が建物が建っていたのかと疑うほど本当に何もないところもあり、言葉がでませんでした。そして改めて自然の力の恐ろしさを感じました。

今回、現地の方々と接する機会が少なかったのですが、そんな中でも地元の漁師さんたちと一緒にアンカー作りをしたり、現地の人のお家に伺い津波の映像を見せていただいたことは、自分にとっても本当に大きかったです。漁師の方々は皆さん明るくて面白くて、逆にこちらが元気をもらってしまいました。しかし、明るくふるまっているけれど、この震災で辛い思いもたくさんされているのだと思うと、本当に心が痛みます。また、見せていただいた津波の映像は本当に生々しく衝撃的でした。映像に残っている住民の声もリアルで、その時の状況や心情がすごく伝わってきました。あっという間に町が水に覆われていって、その早さに驚きました。1人1人が自分の命を第1に考えて行動すれば、全員助かる可能性が高いらしいです。実際、他の人を助けようとして津波に流されてしまっている人も映像に写っていました。全員助かる可能性が高いなら、そうすべきだと思います。しかし、実際そのような状況になって目の前に誰かいたら、果たして見過ごすこ

とができるのかなと、思ってしまう自分もいました。

今回ボランティアに行って、地元の方々とふれあうことの大切さを改めて感じました。自分自身にとっても学ぶことが多かったです。実際にお会いしてお話をする。これだけでも地元の方々を元気づけてあげられると思いますし、心の傷は一生消えないと思うので、精神的なケアはさらに必要になってくると思います。また気仙沼に行きたいです。そして、これからも自分にできる限り被災地の皆さんの支援をしたいと思いました。

このボランティアのプロジェクトに関わった全ての皆様に感謝でいっぱいです。本当にありがとうございます。

文学部3年 原田

私がこのボランティアに参加した理由は、今回の震災の状況はテレビや新聞などで見てはいたものの、とても自分が住んでいる日本国内で起こった出来事とは思えず、同じ日本人として現地に行ってこの目で現状を見たいと感じたことがきっかけでした。

実際現地に到着してその風景を見てみると、あまりの悲惨さに言葉がでず、涙が出てきました。テレビの映像や写真で見るとは全く違い、自分なんかに何ができるのという思いが湧いてきました。私は到着した日に瓦礫撤去に参加したのですが、半日かけても一つの家のほんの一部分しか片づけることしかできず、改めて自分の無力さを感じました。1日目終了後はそのような思いでいっぱいでした。次の日には写真洗浄をしたり、漁師さんのアンカー作りを手伝ったりと様々な活動をしました。その中でも漁師さんに言われた一言が、自信を失くしかけていた私をボランティアにきてよかったと感じさせてくれました。「肉体的なボランティアももちろんすごく嬉しいけど、君たちがこうやって僕たちと笑顔で話してくれることが何よりも力になって、これから先もみんなのために頑張らなきゃいけないと思わせてくれるんだよ。本当にありがとう。」この言葉が、私にとってとても嬉しく、こんなちっぽけな自分でも力になれたんだと思わせてくれました。

私はこのボランティアで現地の人を元気づけたいという気持ちで臨みましたが、実際現地には明るい方々が多く、逆に私が元気づけられてしまったと感じました。しかし、同時にこの笑顔の裏には深い悲しみも隠しているのではとも思うので、これからは被災者への精神面のサポートが最も重要になっていくと考えます。

もちろん現地に行って復興のお手伝いをする 것도大事ですが、それだけがボランティアではないので、今回自分が経験したことを周りの人たちに伝えて、一人でも多くの人たちが何らかの形でボランティアに関わって、少しでも復興が早くなることを願いたいと思います。

今回この活動をしたことが終わりではなく、始まりだと思うので、これからも自分なりに被災地のためにできることを頑張っていきたいと思います。

法学部3年 大石

瓦礫撤去&アンカー作りは 非常に危険な作業であるため、事前の準備段階でリーダーのきくちゃんから細かい指導がありました。

そして、当日も出発する前に全員揃って、作業用具・装備品の確認を行いました。

活動内容としては、津波の被害を受け、破損した家の瓦礫やごみの整理と周辺に生えた雑草の草むしりでした。どちらの作業も非常に力と体力を使う仕事であったので、女性の方はかなりきつかったと思われます。また、瓦礫撤去の際、釘が飛び出でている大木があちこちにあったので、思った以上に危険な作業であると作業をしてみて実感しました。なので、私自身危険物を運ぶ際や重たいものを運ぶ際は必ず声かけをするように心掛けました。アンカー作りでは、私は砂利を袋に詰めるという作業を行いました。休憩は多くはさんだのですが、ひたすら砂利を袋に詰めるという活動を行っていたので、腰がやられました(笑)。全体としては、みんな疲れていながらも、一人ひとりが協力しあって、作業ができたのではないかと思います。

被害にあった家や地域から発見された写真を洗浄して、持ち主に返すという活動もやりました。このように人の思い出を扱う作業であったので、写真の取り扱いには非常に注意を払って、活動を行いました。作業をしていて、やはり感じたことはこの活動を常に行っている方たちの粘り強さです。はっきりいって、もう薄れて何が何だかわからない写真や大部分が破れている写真であっても、保管するのです。「絶対に写真を持ち主に返す」という思い強さを知れ、私自身もいろんな意味で感化される活動であったと思います。

生活班では主に体育館や公民館の清掃を行ったのですが、第10クールが入った時に比べてだいぶきれいになったと思います。また、土器修復にも携わり、私としても非常に貴重な体験ができました。翌日の朝飯のおにぎり作りにも挑戦しました。男性陣はなかなかうまく作れず、男子と女子の力量の差を感じました。

活動全体を通して言えることは、私たち第10クールはみんなとても仲良く活動できたのではないかと思います。特に公私にわたってのメリハリがしっかりできており、グダることがほとんどなかったのではないかと感じました。

一緒に活動した他大学の皆さん方、そして、舩岡さんをリーダーとする同大学のみんなには非常に充実した1週間を過ごせたことに本当に感謝しています。また、いつかあんな感じに集まれることを楽しみにしています。

ありがとうございました。

法学部3年 石原

今回ボランティアに行ってお友達学生が感じたのは、ボランティアは勿論、より多くの人に東北を訪れてもらって、風化させない、忘れていないという精神的な面の支えが必要なフェーズに来ていることでした。

それには、明治学院大学の継続的な支援のために義援金が必要であり、直接的な支援の

ためにも義援金を募る名目が必要であると私は考えました。

今日の朝、町のタウン誌を編集してらっしゃるみなと倶楽部の大海さんと直接コンタクトをとる機会があり、お話を聞かせていただいて今回の学園祭で東日本大震災の冊子を定価より上乗せし、上乗せした分を義援金に回し販売することを同意してくださいました。

これからの継続的な支援のために何かしたい。何かを起こすというスタートアップの動きがいま求められているとわたしは今回ボランティアに行き、強く感じました。

法学部3年 渡辺

以上